

# 看護教育において闘病記「愛、深き淵より」から学べること

淘江七海子

香川県立医療短期大学看護学科

## Learning by a Description of Fight against Disease “Ai, Fukaki Fuchi Yori” on Nursing Education

Namiko Yurie

*Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences.*

### Abstract

This report describes an educational method which will be useful for nursing students to understand “The Concept of Nursing” in the class of Fundamental Nursing.

As teaching material, a description of fight against disease, a book of “Ai, Fukaki Fuchi Yori (Love, Recovery from Desperate State)” written by Tomihiro Hoshino, was used.

In this book, there are suggestive scenes for nursing students indicating the importance of choice of words during the care of the patients. The writer found the pleasure by some encouraging words and felt hurt by other words even without such intention. In addition, it will be useful for the students to read the story itself to learn the process of his physical and mental recovery seeing how he struggled against his disease for 9 years long in the hospital.

We will use this material in the classes to educate nursing students the importance of the choice of words in the medical treatment and how to employ the language in the communication with the patients.

In this report, we made it clear that these scenes were able to be used as teaching material on units of bedside practice and communication.

**Key Words :** 看護教育 (nursing education) 闘病記 (description of fight against disease) ことば (language) 教材 (teaching material)

\*連絡先：〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護科

\*Corresponding address : Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,  
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0123, Japan

## はじめに

看護を志す学生にとって、看護の歴史や先達の理論を学ぶことは必須とされる。しかし、入学当初、実体験の少ない学生がこれらの概念を学ぶことは、言葉の暗記に止まりやすく、具体的イメージをもって捉えることは困難である。こうした状況を改善するために、最近、ドキュメンタリー映像<sup>1)</sup>・ドキュメンタリー小説<sup>2)</sup>や模型<sup>3)</sup>・実物<sup>4)</sup>を活用し、その学習効果が研究されている。学生が授業に積極的に参加する姿勢を生み出すためには、教材に対する創意工夫が大切である。

筆者は、基礎看護学の授業で闘病記を教材として活用したいと考えている。具体的教材として、頸髄損傷のため9年間の入院生活を余儀なくされ、その後も下半身麻痺の状態で日常生活を送っている星野富弘さんの闘病記「愛、深き淵より」<sup>5)</sup>を取り上げる。

闘病記に関する論文としては、杉本<sup>6)</sup>が、癌の告知に焦点をあてて、闘病記の患者の言葉を分析し、患者そして医療者が相互行為としてのコミュニケーションを創り上げる必要性を述べたものがある。

本研究においては、闘病記を基礎看護学、特にコミュニケーションの教材として活用することについて検討したので報告する。

## 研究目的

基礎看護学の学習目標を達成するために、闘病記を教材として活用することの有用性を検討する。

## 研究方法

1. 本研究で教材として用いる闘病記の概要について述べる。闘病記「愛、深き淵より」に登場する星野さんは昭和21年群馬県に生まれた。大学は教育学部保健体育科を卒業し、中学校体育教師として赴任していた。放課後のマット運動練習中の事故により、就職後わずか2ヶ月で「第4頸椎前方脱臼骨折・頸髄損傷」を負った。そのため、肩より下が完全麻痺し、日常生活のすべてに他人の世話を必要とした。この闘病記は、その9年間にわたる入院生活について綴ったものである。但し、本書は、退院後、闘病生活を振り返って書かれたものである。

2. 闘病記が本学カリキュラムの基礎看護学実習および基礎看護技術論における学習目標を達成するための教材として活用できるかを検討する。

基礎看護学は、表1に示すとおり、看護学概論・基礎看護技術論・臨床看護総論・基礎看護学特論（選択科目）・基礎看護学実習の5科目で構成されている。

基礎看護学実習Ⅰの学習目標2)の「看護者としての援助のあり方を学ぶ」は、実習場面で学生が患者とどのようにコミュニケーションをとりながらかわるかを体験して習得することにある。また、基礎看護技術論の単位では、コミュニケーションの原理や看護における重要性を学ぶことが目標である。

表1 基礎看護学の関連単位と学習目標

| 学 科 目   | 単位 | 関 連 単 元   | 学 習 目 標   |
|---------|----|-----------|---|
| 看護学概論   | 3  |           |   |
| 基礎看護技術論 | 5  | コミュニケーション | 1) コミュニケーションについての基礎的知識を理解する<br>2) 対象およびそれを取りまく人々とのよい人間関係をもつことができる<br>3) 看護ケアを行うことによって、患者とのコミュニケーションを深めることができる |
| 臨床看護総論  | 2  |           |   |
| 基礎看護学特論 | 1  |           |   |
| 基礎看護学実習 | 3  | 実習Ⅰ       | 1) 実習病院や施設の見学を通して、看護学の学習の動機づけとする<br>2) 患者の入院生活への援助を実践することにより、看護者としての援助のあり方を学ぶ                                 |

## 結果および考察

### 1. 基礎看護学実習における教材

#### 1) 闘病記に描かれている「学生S」の体験

「学生S」が星野さんを受け持ったのは、不慮の事故から3年たった頃だった。その間、呼吸停止や痙攣など危機的状況に陥ることもあったが、その頃には、全身状態も落ち着いていた。しかし、四肢麻痺は残り、機能回復の見込みも全くなき、不動状態<sup>\*)</sup>という現在の医学による積極的な治療法がない状態に変わりにはなかった。

星野さんは、闘病記でSのことを「おとなしい感じの人で、食事を摂らせてくれたり、身体を拭いてくれたりする時のまなざしは真剣そのものだ」と記している。

以下、Sが星野さんにペンを口にくわえて書く時の姿勢について提案している場面である。これが星野さんの人生において、一大転換のきっかけをつくることになった。

#### 引用文1. (p104-106)

「その姿勢で字を書いたらどうでしょう」学生Sはなにげなく言った。その姿勢とは日ごろからよくとっている横向きの姿勢である。

今まで「横向きで字を書いたらどうかなあ。」と母にいったこともあったが、ペンを口にくわえて、上に向かって書くことばかりに、あまりにも強くこだわっていた。(中略)

横向きになった顔の前に、Sがスケッチブックを立てて持ってくれた。「ア」「イ」…黒い糸の切れ端のようにもつれた文字がだんだん増えていった。目が回った。よだれがサインペンのガーゼをぐしょぐしょにしてほっぺたを伝わって枕にしみた。慣れないものをくわえるためだろうか吐き気もしてきた。しかし、うれしかった。うれしくてうれしくて・・・やめることができなかった。(中略)

その夜高熱がでてしまった。しかし、明日が楽しみだった。明日になれば、また字がかける。明日はもっと落ち着いてゆっくり書いてみよう。その夜久しぶりにぐっすりねむった。(中略)

器械体操と同じだ。小さな地味な基礎を積み重ねていけば、口でだってきっと美しい文字が書けるようになれると思った。何年かかってもいい、下手でもいい、どんなにのろくてもいい、それをやることに私に与えられた義務であるような気がした。

この学生の提案は3つの点で時宜を得たものだった。1つは、星野さんが転院していったTくんの帽子に口でくわえた筆でやっとなぞくことのできた二文字「お富」のサインをTくんが非常に喜んでくれるという経験をした直後であったこと、もう1つは、生徒や友達の手紙に自分の手でお礼を書きたいと強く思っていた時期であったこと、更に、3つ目は彼にとって横向きで字を書くことが上向きよりかなり楽でないか、と考えていた時期であったことである。

サインペンを口にくわえて、上向きで書くには頭を枕から浮かせたり動かさなければならず、それは何百キロもの重量物を持ち上げるほどの力が必要だった。しかし、横向きになった顔の前にスケッチブックを立てると、首を少し前に出すことで黒いしみを付けることができた。頭を少しずらすだけで力はいくらも必要なかった。

学生S自身はあまり強く意識することなく、なにげなく言った言葉が星野さんの人生の道を開く触媒となったのである。先に紹介した場面は、日常の誠実な対応が基盤にあって、ふともらした言葉が患者にとって大きな意味をもったと考えられる。

#### 2) 実習における見学場面

星野さんの闘病記には、もう一つ看護学生が出てくる印象的な場面がある。神経麻痺のため、自分の力で排便することができないため、インターフォンに向かって「星野ですが、浣腸してください」と言ったら、看護婦さんの後から5、6人の看護学生がくっついて来た。「エライことだ。実験台になるんだ」との星野さんの戸惑う気持ちとは全く無関係といった様子で、看護婦が衝立をする場面である。

#### 引用文2. (p123-124)

「普段はほとんど使わないのにこんな時ばかり衝立てなんか立てなくてもよいのに」私は看護婦さんに聞こえないようにつぶやいた。それが、私からの小さな悲しい抵抗の言葉だった。今までも何度かこういうことはあったが、それはひとりかふたりの実習生で、こんなに大勢の学生の前でしりをまくられるのははじめてだった。

彼女らはみな19歳。私は動けないといっても恥ずかしいということだって、自尊心だって正常に持っている20代の男である。「浣腸してください。」とマイクに向かって大声

\*)さまざまな原因や理由などによって、部分的あるいは全身的に、または一時的、あるいは長期、永久的に、動かない、あるいは動けない、または動いてはいけない状態にあることをいう。

で言うのも、私が長い間かかって身につけた、のがれようのない恥ずかしさをかくす知恵だったのに。(中略)

看護婦さんが私の足を持ち上げてよくみえるように説明している。私は目をつぶった。手が動けば耳もふさぎたかった。顔もおおいたかった。いや、手が動けばこんなみじめな思いはしないのだろう。

「医学のためなんだ。これがお世話になっている人たちへ、私のできるたった一つのおれなんだ」といくら自分にいいかせても、恥ずかしさはどうしようもないくやしさとなってしまうのだった。

「バカヤロウ、チクショウ、テメエラ同士でケツまくって毎日だって練習すればいいじゃないか」しかし、浣腸が終わってから、学生達が口々に「ありがとうございます」というのをきいたら、私の口からはつい、「お世話になりました」という言葉が出てしまった。言ってしまうて、思わずひとり笑ってしまった。淋しい笑い顔なんだろうと思いつつ笑った。

この場面は、入院して3年近く過ぎて、リハビリの方法が検討され始めた頃のことである。看護学生にとっては、日常の臨地実習ではありふれた1コマかもしれない。見学という点で、事故につながるものではないとしても、患者への精神面の影響を考慮しなければならないことが示唆される。

臨地実習において、どのような方法で何を学ばせるのかという目標、内容と方法の妥当性を検討することと、患者への事前説明や承諾を得ることは欠かせない。また、学生が患者の恥ずかしさや辛さなどの感情への配慮ができるような具体的アドバイスが必要である。

治療や看護の過程で、感情を正面から取り上げたり、直視したりせずに、患者は恥ずかしさは感じていないと素っ気なく振舞うことが多い。その方が患者自身もあれこれ思いめぐらさなくて楽であるということを前提にしているように思われる。

患者の恥ずかしさや辛さを認めることは、看護者自身が感じている恥ずかしい思いを認めることである。しかし、看護する中で、心に湧いてくる気持ちに蓋をしたり、感じていることを感じていないように振る舞うことは、人としての自然な姿から、離れてしまうことになる。感情に視点におく看護を実践していく必要性を感じる場面である。

### 3) 実習での闘病記の活用

星野さんの闘病記は数多く出版され<sup>\*\*</sup>、多くの人に感動を与えた。そして、彼が描いた彼の人生そのものである書画は、故郷である群馬県の富弘美術館を基点にし、全国の会場で紹介されている。著書や書画は、闘病中の人々に止まらず、健康な人々にも勇気を与え、毎日の生活への感謝や喜びに気づかせてくれる。また、看護学生にとっても苦悩を乗り越える原動力になったり、患者の生き方や病気の受け止め方に影響を与えることがある。

筆者自身が以前に関わった看護学生の実習記録から、星野さんの闘病記を活用した一例を示してみる。

学生が受け持ったTさんは、10年前に卵巣ガンの手術をしたが再発し、化学療法のための入退院をくりかえし、3回目の入院生活を送っていた。癌性腹膜炎のため腹水が著明であり、横隔膜や胃などの圧迫による腹背部の疼痛を強く訴えていた。

看護学生Hは、患者が必死で痛みと闘いながらつぶやく「ガンも早期ならええけど、これほど進んだらいかんわな」、「死ぬときは、もっともっともぐらしいけん、私は今くらいの痛みでは死ねんのやろうなあ」などの患者の激しい言葉に立ちすくむしかなかった。しかし、患者は、痛みのないときは「バラがええ匂いしよる」、「病気になっても、それをどう捉えるかはその人の考え方やネ」などとよくしゃべり、本来の明るい雰囲気を取り戻すこともあったという。

学生Hは、「愛、深き淵より」と画集「風の旅」を、ガンの闘病記でないことを理由に、患者に読んで見たらと渡した。Tさんは、この本を実習期間中ずっと枕元に置いていた。訪室したとき、本を読んでも涙を流していることもあった。彼女としては、「悲観的になってるばかりじゃいけません」というメッセージを伝えたかったが、たかだか20年しか生きていない自分が励ますのは不遜な気がして、その思いを本に託したのである。

この本で、Tさんは、気持ちが和らぐというよりも、「物事の受け止め方が肝腎なのね」ということに、気づくことができたようである。

看護学生にとって、実習は自ら体験することにより、知識や技術を習得でき、看護に興味や関心を抱き、学習意欲が喚起される場である。対象者との関わりを通して、人間的成長が促される場でもある。

\*\* 2000年5月現在、新版出版。『風の旅』『かぎりなくやさしい花々』『鈴の鳴る道』『銀色のあしあと・三浦綾子との対談』『速さのちがう時計』『あなたの手のひら』がある

学生は適切な援助ができないことから、技術の未熟さを自覚したり、人間関係の難しさに戸惑い、看護婦としての適性に悩むことがある。この苦しみを学びに深めていく関わりが、実習指導者の使命である。この例のように、闘病記は、患者を励ますためにも、また、学生自身が看護婦としての資質を高めるためにも活用することができる。

## 2. 基礎看護技術論における教材

患者が療養生活において、障害受容をしていくプロセスで、「ことば」がいかに影響を与えたか、また、その大切さを検討する。

### 1) 障害受容のプロセス

彼の思いがけない受傷、それに続く9年間の療養生活は気の遠くなるような過程である。一日一日あるいは、その時その時をどう過ごしていくのか、忍耐が伴うものである。

著書「愛、深き淵より」に綴られた入院生活の9年間は、1) 受傷直後の2ヶ月間、2) 呼吸停止や痙攣をおこすこともあるが、小康状態が続く1年5ヶ月間、3) 回復の見込みがなく、全身管理のみの1年3ヶ月間、4) 膀胱結石の併発を乗り越えながら「洗礼」をうけた1年7ヶ月間、5) リクライニングつき車いすに挑戦した3年間、6) 下顎レバーによる電動車いすが届き、闘病中に描き続けた書画の展覧会を開き、退院を決意する1年5ヶ月間の6つの時期に区分することができる。

この星野さんの経過を、N.Cohn<sup>7)</sup>による障害受容のプロセス5段階(表2)と比較・検討してみる。

Cohnの第1段階は受傷直後2ヶ月頃にあたり、第2・3・4段階は4年近くかかっており、病状も良くなったり、悪くなったりしている。その後の3年半は信仰の力を借りながら徐々に第5段階「適応

の時期」に進み、退院時点において第5段階に達したと考えられる。とはいえ、その後の故郷での生活を過ごしていくには、当然であるが、その時々状況によって悲嘆したり、無力感に襲われたり、防衛的になったりしている。

### 2) 星野さんにとっての「ことば」

前記したが、この闘病記は、退院後、療養生活を振り返って書かれたものであることを認識して読む必要がある。彼も画集の冒頭で「過去の苦しみが後になって楽しく思い出せるように、人の心には仕掛けがしてあるようだ」と述べている。「ことば」を彼の文中から拾い出しながら、彼にとっての「ことば」の意味を検討する。

#### ①「ことば」を使えるということ

#### 引用文3. (p37-40)

不思議なことに声が出せなくなると耳まで聞こえなくなると錯覚してしまうらしく、姉たちも私に話し掛けることをびたりとやめてしまった。(中略)

口の開き方で言葉を読みとってもらおうと、一言一言大きく口をあけて言葉をつくった。姉たちも大きく口をあけて声をだし、私の口の形をまねながら、言葉をよみとろうとする。けれども、まるっきりトンチンカン。はじめはあまりのもどかしさにイライラしたが、次第におもしろくなり1つのレクリエーションとなった。(中略)

50音文字表で指さしてくれてもうなずけない。ニッコリ笑う・舌をチョンとならすなどを考え出す。

受傷直後、横隔膜を動かす神経が無事だったため、かろうじて腹式呼吸が可能だった。しかし、体力なども低下していて、普通の人の1/2以下の呼吸量をやっと維持している状態で常に危険だった。

表2 N.Cohnによる障害受容のプロセス

| 段 階  | 時 期         | 状 況   |
|------|-------------|---|
| 第1段階 | ショック期       | 自分におこった事態の重大さは認識していない   |
| 第2段階 | 回復への期待をもつ時期 | 障害が自分におこったことは認めるが、必ず直ると確信している   |
| 第3段階 | 悲嘆の時期       | 障害を直視し、否定しがたい現実には圧倒され、将来の望みは打ち砕かれ、無力感におそわれる   |
| 第4段階 | 防衛の時期       | 障害に自らの努力で対抗し、打ち勝つことが可能であるとみえてくる。しかし、障害の重篤さや永続性を意識すると、逃避、退行、合理化という防衛反応をおこす                                   |
| 第5段階 | 適応の時期       | 他者と比較するのではなく、障害者としての新たな自己固有の価値体系をもつようになり、自分の生き方に自信がもてる。障害をもったことが、人間としての価値を損なうものではないということを手でなく、感情としても受け止められる |

頸部も固定され微動だにゆるされない。気管切開後は声も全く出せなくなる。来る日も来る日も天井を見上げて過ごす。天井を見つめたまま、目をパチクリさせることしかできなくなっていた頃のこと、Cohnの第2段階にあたる。ここに取り上げた文章は、逆境にあっても自分に残されている機能を使おうとする逞しさと共にユーモアを感じとることができる。

また、眠れぬ夜をどうにかしたいと「数を数える」、「掛け算の九九を空んじる」ことを試み、ふと中学生のころ暗誦していた詩を思い出す。覚えている限りの詩を片一端から心の中で何回も何回も飽きることなく繰り返した。すると、いつの間にか穏やかな眠りにつくことができたというのである。「苦しい時に自らを慰め、力になるものが自らの中にあることに気づき、彼は命ある言葉をもっとたくさん心の中に蓄えたいと思った」と記している。後から考えると、彼の詩歌作家の出発点となったのである。

普段それほど意識していないが、私たちは言葉の力を借りて、耐えがたい苦しみの時間を耐え、怒りや不安を鎮めたりしていることに気づかせてくれる場面である。

## ②「ことば」を使えることの愉しみ

入院患者であったKさんからは、「偉くもない、そうかといって卑屈にもならない、ありのままを見つめながら、ありのままの姿で、胸を張って生きること」の勇気とその姿の美しさを教えられたと彼は記述している。

### 引用文4. (p83-84)

ある日ふと、5階（脳神経外科）の窓にたつ空色のガウンをきた女性を見ていたら、その人も私の方を見ているように思えた。そう思い始めるとますますそんな気がしてきた。五階にあがってみた。話してみると私と同じ年齢でKさんといった。それからは毎日私の部屋に遊びにきて私達を笑わせてくれた。話をしていると、私はとっても素直になれるような気がした。忍耐や根性、若さだとかの励ましのことばは一度もきかなかった。同情やあわれみもない普通の話をしてながら毎日が過ぎた。五階の窓から、懐中電灯をふってオヤスミ、マタアシタと文字をかいてみせた。私も母にたのんで懐中電灯で文字をかいてもらった。（中略）

毎日、懐中電灯の会話がはじまった。退院後も何回も手紙をもらった。

この場面では、励ます、慰めることの難しさが示されている。我々は安易に「大丈夫よ」、「心配いら

ないよ」、あるいは「頑張ってください」という言葉をよく使う。しかし、現実の看護場面では、努力とか頑張りではどうしようもない場面に出会うことが多い。そのような時、看護婦は、言葉を使って自分の価値観や経験で患者を慰めたり、励ましたりしがちである。しかし、どんな言葉を投げかけるかということよりも、言葉を交わせることそのものが愉しみとなり、言葉を交わせることが生きる力になったと考えられる場面である。看護婦は、誠意を持って患者と向き合うことは勿論だが、話すこと自体を愉しむゆとりやユーモアを持つことを実践に取り入れたいと思う。

## ③「ことば」の残酷さ

引用文5は、「いくら希望をいだいてみても、私の身体は頑として動かなかった。何日すぎても、何ヶ月過ぎても――」と認めたくはないが、現実を認めざるを得ない状況が描かれており、Cohnの第3段階の悲嘆の時期に当たる。

### 引用文5. (p77-79) (p155)

ある老人は、私を慰めるようにやさしい声で、ひとりの青年の話をしてくれた。「鉄棒からおちてそれきり手足が動かなくなってしまう、もう何年も寝たまま。毎日天井を向いただけで何もできない。ただ、生きているというだけなんだ。（中略）今の医学でもあんなってしまおうと直らないそうですよ。」と。（中略）

今まで見舞いにきてくれた人たちの言った「元気そうだね。」「すぐになおるさ」という言葉は本当の言葉ではなかったのだ。

同室の老人が面会者に小声で話している。「あの人なあ、首から下が全部動かねえんだぞ、大学出たって、あんなちまったらおしまいだ。」（中略）その老人は退院の日に、松葉づえをついて私のベッドの横にきて、「星野さん、がんばってくださいよ、絶対良くなってくださいよ。」と、声をふるわせ、涙をボロボロこぼした。

全く偶然に、ある老人から現実を突きつけられた残酷な場面であったが、それまで家族や友人から言われてきた言葉はやさしさがいわせた「うそ」だと気づくのである。

また、後半の場面では、もう一度自分の中で思索したり、自らに言い聞かせたりして自分を納得させている。すなわち、「私は些細なことで腹をたて、人を恨んでいた。自分の心の狭さを恥づかしいと思った。動けないことを悲しみながら、一生を終えて

も自然の摂理に何の変化があるのだろうか。だとしたら、自分の身体のことを悲しむのなんて馬鹿げたことではないだろうか」と。

人間の世界は不思議なもので、傷ついた言葉から、より深い認識に至ることもある。意図して傷つけないようにすることは勿論である。しかし、言葉を発した人は意図していなくても、受け取った側が心の深い傷を負ってしまうことはよくある。看護婦は自分が発した「ことば」に対する相手の反応を確認することが重要である。

#### ④「ことば」による導き

#### 引用文6. (p91)

三浦綾子「道ありき」より

「生きるということは権利ではなく義務です」

「生きているのではなく生かされているのです」

ほとんどベッドの上で、上を向いたまま13年間も病氣と闘った作家・三浦綾子のこの言葉に星野さんが感銘を受ける場面がある。

熱が出たりお腹が張ったりは相変わらずで、四肢麻痺や全身状態の回復の見込みが全くなく、現在の医学では積極的な治療法はない。ただ、じっくり時間をかけて、体力がつくのを待つ毎日が続いていた。この時期は、Cohnのいう第4段階に当たる。この頃のことを「これから先のことがいろいろ思いやられるのか、天井をじっとみつめていることが多く、ハッとさせられます。」と彼の母は彼の著書の添え書きに書いている。

この頃のことを星野さんは、「訪れてくれる牧師さんから、＜神＞とか＜キリスト＞とかの言葉を聞くのがなんとなく嫌だったり、牧師さんと話をしている時、隣のベッドにいる人の視線が気になったりした。一方、自分の気持ちに正直でないことを感じる自分がいた」と記している。また、彼は、高校生のころ、＜労する者、重荷を負うもの、われに來れ＞という聖書の言葉に出会ったことを思い出した。膀胱結石の手術前に、病棟の看護婦から『特別な宗教をお持ちですか』と聞かれ、思わず知らず『キリスト教です』と答えている自分に気づいている。その時、神の言葉＜われに來れ＞に従ってみようと思った」と記している。星野さんは1974年12月22日に洗礼を受けている。

彼は、聖書の言葉やクリスチャンと呼ばれる人々の姿に心を揺さぶられ、クリスチャンである大学時代の先輩が祈ってくれたり、聖書を送ってくれたり

することに、少しずつ心を開いていく。彼は自分の苦しみだけのために苦しみ、生きることを諦めていた自分が恥ずかしくなった。そして＜ローマ人への手紙＞にある＜そればかりではなく、艱難さえもよるこんでいる。それは艱難が忍耐を生みだし、忍耐が品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出す＞というこの言葉自体がすでに希望だと思うようになる。

以上のように、彼は聖書の言葉や周囲の人々とのやりとりから、何とかして生きていこうと模索を始める自分に気づいていく。

#### ⑤「ことば」による探求の喜び

#### 引用文7. (p157)

動ける人が

動かないでいるのには

忍耐が必要だ

私のように 動けない者が

動かないでいるのに

忍耐など必要だろうか

そう気づいた時

私の体をギリギリに縛りつけていた

「忍耐」という棘のはえた縄が

“フッ”と解けたような気がした

車いすを使うようになって行動範囲が広がり、友人、同室者、家族や看護婦など多くの人々や自然に触れ、「ことば」で考え、「ことば」で探求していく喜びを見つけていく。この詩は、星野さんが自分の障害を受け止め、残された能力を生かして自分らしく生きていこうとする姿を映し出している。

受け取った手紙にはできるだけ返事を書いた。文字だけでなく、花の絵を書き添えて出すと、友達がとても喜んでくれる。そのことは星野さんを益々張りきらせた。「花には一つとして余分なものはなく、足りないものもない。また、花は美しさばかりでなく、ぶつかって来るような力強さもある」と、豊かな感性で描く対象を見つめていく。そして、スケッチブックを取り付ける台を作ってもらったり、サインペンの使い方や色合いにも工夫がなされ、数多くの作品が創り出されていった。

#### ⑥「ことば」を生かして、新たな旅立ち

今まで書き溜めてきたものをこのまま埋らせてしまわず、他の人にも見てもらったらの話が持ちあがる。

## 引用文 8. (p175-176)

身障センター所長から、星野さんの展覧会をやろうと言われた。(中略)「福祉に一番大切な心が失われてきてしまったように思うのです。(中略)

そういう中で9年間も息子さんの手足となってこられたお母さん、とお母さんの混ぜあわせた、絵の具のついた筆をくわえて描いた絵を通して、福祉で一番大切な心のつながりを紹介したいのです。」と。(中略)

「お願いします」と言ってしまったその日の夜、私はなかなか眠れなかった。

一体誰が見に来てくれるのか、見てもらうようなものでもない、との彼自身の心配にもかかわらず、展覧会は大成に終わった。画とその横に添える「ことば」はこれまでの9年間の闘いから、ほとぼしり出てくるように描かれたもので、人々に感動を与えた。

思いきって開いた展覧会の会場に置かれた語り掛け帖は、感想、励まし、共感、自分の身の上話、懐かしい友達の名前などで大学ノート4冊にもなっていた。その中には、「どれだけ深く、どれだけ丁寧に自分の人生を生きるかが大切ですね」とか「私は手も足も動くけれど貴方の方がずっと毎日を大切に生きているなあと思ったら、すごく恥ずかしくなった」また、「《折れた菜の花》の中で《強い茎になろう》と書いているが、この言葉が書かれるまでにどれだけの心の闘いがあったらと思うます」などと書かれていた。5年間描き溜めた60枚の絵はすべて彼の手許から巣立っていった。

この機会に、彼は長く迷っていたことに終止符を打ち、「よし、家に帰ろう」と決心したのである。諦めであっても、覚悟であっても、また自由意志であっても、家に帰ることと画と詩を書くこと、を、彼は選択した。これが社会や家族に対する自分の役割なんだと理解し、精一杯その責任を果たしていく。この選択が自分を拘束することがあっても、自分を自分で癒していくことができた。

人生は決断の連続であるが、人間はその時その場において、自分の持てる最大の知恵と力を振りしぼって生きている。だから、結果の良し悪しで選んだことを悩むのではなく、反省をしながら、責任を持って目の前にあたりに、結果が良かれと折りながら、日々を重ねていくことの大切さを教えてくれる場面である。

## 結 論

### 1. 基礎看護学実習における教材

引用文1, 2および事例紹介は、臨地実習での学習方法に示唆を与えてくれる。学生としての患者への接し方や見学場面での患者への配慮、さらに闘病記に触れる意味を考えていく教材とすることができる。

また、これらの教材は、入学後最初に体験する基礎看護学実習の導入にも役立つと考える。さらに、基礎看護学に続く各看護学での臨地実習での学習方法や学習内容のイメージ化もできると考える。

### 2. 基礎看護技術論における教材

引用文3-8は、障害受容のプロセスをたどる患者にとって、「ことば」を使えること、使えることのゆしみ、残酷さ、導き、探究の喜び、生かして旅立つ等「ことば」の果たした役割について考えることが出来ることを示した。闘病記による追体験の学習は、学生自身が実体験を広げていくことに役立つと思われる。

## おわりに

闘病記は専門職に対する客観的な評価として、看護が病人やその家族の目にどのように映っているか、という視点で読むことができる。

星野さんは、「ことば」を苦しい闘病生活の支えとしただけでなく、書く、描くという表現手段を手に入れ、自分の運命を受容しながら、新たな生活手段を獲得していった。彼の闘病生活で言葉の果たした役割の大きさを考えると、日常の看護場面での関わりにおいても、患者の表現を援助することが重要であるといえる。

今後、実際に闘病記を用いた教育方法による学習効果を明らかにしていきたい。

## 文 献

- 1) 藤岡完治・尾宜譜美子(1999)“わかる授業をつくる看護教育技法4メディア・教材”,医学書院,東京,60-68.
- 2) 藤岡完治2),P.26-35.
- 3) 藤岡完治2),P.46-84.
- 4) 藤岡完治2),P.85-92.
- 5) 星野富弘(1981)“愛,深き淵より”,立風書房,東京.



- 6) 杉本正子 (1995) 癌の告知をめぐる患者・医療者間コミュニケーションー闘病記からとらえた患者からのメッセージー, 東京都立医療技術短期大学紀要, 8, 149-158.
- 7) 佐藤礼子・小島操子 (1997) “不動状態にある患者に対するリハビリテーション看護, 系統看護学講座・成人看護学総論”, 医学書院, 東京, 202-209.

---

受付日 2001年1月5日